

【^{おとめ}娘子はなぜ？】

^{たかはしのむしまろ}高橋虫麻呂という官人が、今の芦屋から神戸のあたりを旅した時のことです。道中にあった古墳の伝説を詠んだ歌が、『万葉集』の巻九に残されています。その長歌には、葦屋^{あしや}の菟原娘子^{うないおとめ}が、八歳の幼い髪の時から、小さく髪を結び上げはじめる年頃まで、隣近所の家にも姿を見せないでいたとあります。男たちは一目見たいとやきもきして、垣根のように集まって求婚したそうです。特に千沼^{ちぬおとこ}壮士と菟原^{うないおとこ}壮士の二人が、激しく争ったことが詠まれています。今日の関空あたりの海を、古くは「千沼の海」と呼びました。神戸まで、船の往来が活発だった様子がかがわれます。二人が激しく闘った中に、

(前略) 水に入り 火にも入らむと 立ち向かひ 競^{きほ}ひし時に (後略)

(前略) 入水 火尔毛将入跡 立向 競時尔 (後略)

一八〇九番歌

と表現されている部分は、今日でも「あなたのためなら、たとえ火の中、水の中でも」といえそうです。こうした様子を見て、娘子がお母さんに言います。「私のために、立派な男たちが争われるのを見ると、生きていたとしても結婚できそうにありません。黄泉^{よみ}の国でお待ちしましょう」と、嘆き海に身を投げてしまいました。千沼壮士はその夜、彼女の死を夢で知ります。万葉の時代は、思う人が相手の夢に現れました。千沼壮士はすぐさまあとを追います。後れをとった菟原壮士は、たいそう悔しがり、あんな奴に負けてなるものかと、やはり後を追って逝ってしまいます。親族たちは集まり、このような出来事は後の世まで語り伝えようと、娘子の墓を中に造り置いて、壮士墓をその両側に造ったとのことです。そのいわれを聞いた虫麻呂は、最近の出来事のように思えて、声をあげて泣いてしまったと詠んでいます。

その古墳は、阪神電車の石屋川駅・住吉駅・西灘駅から、それぞれ少し歩いたところに公園化されたり、史跡として整備されたりしています。当時は、山陽道から訪ねられるだけでなく、船で海を航海していても見ることもできたようです。

【『City Life』 2012年4月号阪神・神戸版掲載】